

## 「高齢社会」というペシミズム：日本の人口高齢化 に取り憑いた呪文

安立, 清史  
九州大学大学院人間環境学研究院人間科学部門共生社会学講座

<https://doi.org/10.15017/4771882>

---

出版情報：人間科学共生社会学. 8, pp.101-112, 2018-02-14. Faculty of Human-Environment Studies,  
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



# 「高齢社会」というペシミズム

—日本の人口高齢化に取り憑いた呪文—

安立清史

## 要 旨

日本社会の高齢化の行き着く先に待ち受けている悲観的な将来像がさかんに論じられている。しかし人口構造の高齢化を不可避の「前提」としたとたんに、将来社会の展望にはペシミズムと「諦め」というニヒリズムが結論されてしまう。高齢社会論とニヒリズムとの接着の構造を切断できないか。真木悠介の『時間の比較社会学』がひとつの重要な示唆を与える。人間や社会の高齢化とは真木のいう「時間意識」の問題の変奏である。真木は、ある種の時間意識をもたらすペシミズムやニヒリズムを克服する方法を『時間の比較社会学』として展開している。現在の「高齢社会悲観論」へも、この方法を応用することが出来るのではないかと論じる。

キーワード：真木悠介、時間の比較社会学、高齢社会、高齢社会悲観論、ペシミズムとニヒリズム

## 1 高齢社会に取り憑いた呪文

まず、私たちの現在を色濃く塗り込めている「高齢社会悲観論」についての問題を提起しておこう。日本では人口の少子・高齢化が不可避的に進行し、日本の社会福祉や社会保障に悲観的な将来をもたらすとされている。これは客観的で動かしがたい事実のように見えるが、果たしてそうなのだろうか。ある種の枠組みに拘束された見方（時間意識や社会像）だから、そう見えるのではないか。それは、私たちの未来展望の前提を拘束しているある種の「呪文」のようなものではないのか。

私たちは、いま日本の将来を考えはじめると、いきなり「超高齢社会」や「人口減少社会」という人口学的な客観的な装いをもった見方に取り憑かれてしまう。「人口動態をみると、日本は少子化し高齢化が進行していく、総人口も減少している、やがて半減することは確実だ、したがって社会保障や社会福祉も現在の水準を維持するのは困難だ」、というような人口学的な「予言」に囚われてしまうのだ。このような将来予測を「前提」にしてしまうと、あとは、年金

や医療、福祉、介護などのソーシャル・サービスの水準を維持するのは困難だ、という「高齢社会ベシミズムと人口減少ニヒリズム」にからめとられてしまう。それは一見、客観的な「事実」に基づいているように見えるので、それに抗うことはかなり難しい。実際に、現代の社会保障論や社会福祉論は、この人口学的予測を前提としている。つまり大枠をベシミズムで囲まれた中で、高齢社会のあり方や社会保障を論じている。それは敗戦が確実な試合の終盤を、なかば諦めつつ戦っているようなものである。

だが、このような人口動態に関する将来見通しは、はたして確実に逃れがたいものなのか。また人口の動態とその評価や社会意識とは、相対的に独立のはずなのに、日本においては、その両者が不可避のセット、いわば一種の運命論のように、われわれを拘束してしまうのはなぜか。本論文は、人口学やその将来予測の妥当性やその是非を検討するものではない。しかし、現在の日本の高齢社会論や社会保障論が、ほとんど例外なく前提としている「高齢社会悲観論」を疑うことを主題とする。なぜなら人口動態と「ベシミズム」とをセットで受け入れたとたん、すべては虚しい、いずれは消滅するだけだという「高齢社会ニヒリズム」もまた必然となるからである。

## 2 人口高齢化決定論

人口の動態と、ベシミズムやニヒリズムとは、意識の中では密接に関連することが多いのはたしかだ。しかし、論理的には、独立のはずである<sup>1)</sup>。

日本の「高齢社会悲観論」は、比較社会的にみると、どこか一面的すぎるし、過剰すぎる反応なのだ。事実を確認し、未来を予測することは重要である。しかし、その予測が「悲観」に偏ってゆき、未来への諦めを帰結する傾向が強いと問題だ。それは一種の「オーバーラン」ではないか<sup>2)</sup>。

たとえばヨーロッパの地方、たとえばフランスやイタリアの地方で、「高齢社会」論や「地方消滅」論が盛んだらうか。北欧諸国ではどうか。広大な国土に小さな人口、年間の半分以上は冬というような北欧では、日本の地方よりもはるかに人口密度が低く、消滅しかかっているように見えるはずである。西欧だけでない、西アジアやアフリカなど、日本よりもはるかに厳しい風土や条件であるにもかかわらず、日本のような高齢社会悲観論が蔓延しているという話を聞くことはほとんど、ない。これは、どうしてか。

高齢社会を考えると、条件反射的に、悲観論（私たちはみな老いていく、老いていった先には虚無が待っている、私たちの総人口は減少して行って、やがて消滅する等々）と、政策的なニヒリズム（少子・高齢化のせいで、いずれ年金・医療・福祉・介護などの社会保障負担は財政的に維持できなくなる）が現れてきて、私たちがネガティブな方向へと水路づけていってしまう。このような意識の磁場を問題にしたい。「高齢社会悲観論」が、私たちにかけられた呪文のように取り憑いてきてしまうのだ。

### 3 高齢社会悲観論

近年の社会保障の論議、また介護保険改正のたびに繰り返される議論でも、顕著にこの「高齢社会悲観論」があらわれている。市民の側よりもむしろ国や自治体の政策担当者の側のほうに、より顕著にこのペシミズムとニヒリズムが見られるようだ。介護保険の事業者側にも、当然のようにこの悲観論は伝染する。介護保険の発足時には、高齢化によって「介護」という新たな産業や雇用が創出されるのだという予測と政策意図も語られていた。ところが現在では、そのような肯定的なビジョンは一掃されてしまった。不思議なことである。このような、社会の拠って立つ基盤すら危うくするような悲観論に、なぜやすやすと染まってしまうのか。そして利用者・国民側も、この「高齢社会悲観論」の見方がひろく共有され、いわば「問われない前提条件」のようになってしまっている。これでは将来に向けた建設的な提案や改革や政策がでてくるはずがない。「高齢化の進行によって介護保険はいずれ破綻する」と皆が考えるようになれば、遠からずそのようになってしまおう社会学的に言えば「予言の自己成就のメカニズム」である。

このままでは、最大限努力しても、制度を維持させること、発展ではなく縮小しながら維持させることが最大限の目標になる。制度の運営も、利用制限やサービスの縮小や廃止がメインとなるだろう。いずれにせよ「節約し、縮小し、最後は…諦めるしかない」ということになるだろう。それは究極の消滅へ向けた無意識的な諦念だ。

このペシミズムとニヒリズムに取り憑かれなくて未来を考えることはできないものだろうか。この悲観論から解放される方法はないのだろうか<sup>3)</sup>。

### 4 問われない前提条件

高齢社会論が、現在のような「問われない前提条件」（あるいは人口問題はあえて問わないことにするという前提）のもとで考えられ論じられているとするならば、いずれはペシミズムとニヒリズムへと帰結することが避けられないのではないか。人びとは、まじめに考えれば考えるほど解決策はない、という悲観に陥っていくのではないか。真剣に考えると悲観にいたる、そして悲観の先には諦念があるのみではないだろうか。だから、つきつめては考えないようにしよう、というのが現在の高齢社会論なのではないか。考えるとよけいに分からなくなる、つまり、考えると考えられなくなる、というパラドクスに陥るのが「高齢社会」論の現状なのではないか。

でも、はたして本当にそうなのか。

そうではない、と考える。突破口を示した先行者がいるからだ。一見、高齢化や福祉や介護とは無関係な、別次元の社会学の中に、それは見つかる。真木悠介の『時間の比較社会学』（1981）である。以下、真木悠介の時間論を紹介しながら、われわれの直面している「高齢社会

ペシミズム」を克服する方向を探究していきたい。

## 5 「高齢社会」と時間—真木悠介の『時間の比較社会学』

真木悠介の『時間の比較社会学』は1981年に出版された。35年以上も前の著作である。理論社会学の世界では突出した作品だが、あまりにも突出しているためか、あるいはその探求や考察が、主としてフランスの哲学や文学作品を根拠題材としているためか、理論社会学の外側では、その影響力はあまり発揮されていない。ましてやこの考察が、高齢社会論や社会福祉・社会保障論には応用されたことはない。あまりにもかけ離れているためだろうか。いわば孤立した理論なのである。

しかし、次のような理由で、この著作には、高齢社会を考えるうえできわめて重要な現代的な意味と意義があると考えられる。日本の社会保障や社会福祉を考える時に、その前提となっているのは、人口学的な動態である。その人口学の根元には、将来に投射された私たちの人生の時間意識がある。しかし、その時間意識とはどのようなものなのか、それがあまりにも一面的な時間意識なのではないか、と根底から問いかけているからだ。しかも、この時間意識を批判的に問いかけ、乗り越えることが可能だと論じているからだ。

真木悠介によれば、彼の理論的中心課題は2つある。ひとつは、人が自由に生きようとする、人と人とが対立して相剋的な関係に陥ってしまう、そのような人と社会が生み出す相剋性をどうのりこえるかであり、ふたつめは、人は生きて老いて死んでいく、社会も同じでいずれは虚しくなっていくのではないかというペシミズムやニヒリズムをどう乗り越えるか、であるという。この前者を追求したのが『自我の比較社会学』であり、後者が『時間の比較社会学』である。

高齢社会論を無意識のうちに覆っているのが、社会が老いており、いずれ帰無していくというペシミズムとニヒリズムであるとしたら、『時間の比較社会学』は、現在のわれわれが直面している根本的な課題、しかもその大前提となっている基盤的な前提へと、大胆に切り込むきっかけになるのではないか。

では真木が取り組んだ難題とは何か。「西欧的な時間のニヒリズム」に対抗し、それから解放されることであった。「時間はつねに未来に向かって一方向的に流れてゆき、現在はずねに過ぎ去り、過去となって虚しくなっていく」というニヒリズム、「われわれは最後の時に向かって進んでいる」という西欧近代に発する単線的な終末論的な時間観から解放されることであった。

この探求は、比較社会学という方法はとっているが、用いている材料は、文化人類学的な調査研究や知見、西欧近代、とりわけフランスの文学作品や批評、社会哲学などが中心であり、一瞥したところでは、高齢社会論や社会保障・社会政策論とは無縁であるかのように見える。

しかし高齢社会論が論じられれば論じられるほど、その議論の先、その先の限界がみえてくる。「限界集落」や「地方消滅」や「人口減少社会」が論じられれば論じられるほど、その先に

は「帰無する未来」しか見えなくなる。つまり、未来の社会保障や社会政策が論じられれば論じられるほど、その前提となる人口学の限界点、臨界的が見えてくる。ひとことでいえば、未来や将来について「消失や消滅」という「帰無」が露出してくるのである。そして「ペシミズム」や「ニヒリズム」が表れてくるのである。

## 6 時間の比較社会学を応用する

このように、高齢社会論には、ペシミズムやニヒリズムが取り憑いてしまって、脱いても脱いても脱ぎきれない。洗っても洗っても洗い落とせない。そもそも、高齢社会論には、そのような呪文が取り憑いていると、人びとが意識しているかどうかも疑問である。つまり、高齢社会を論じるとき、私たちは知らず知らず、ある種のペシミズムとニヒリズムに取り憑かれながら論じていることになる。

どういうことか。

「私の死のゆえに私の生はむなしいという感覚、人類の死滅のゆえに人類の歴史はむなしいという感覚は、くまなく明晰な意識にとっては避けることのできない真理のように思われる」(真木、4頁)。人間と人類にとっての未来や将来を、明晰に考えようとすればするほど、いずれ訪れる死や死滅も、明晰に見えてくる、見えてしまう、ということである。

なぜ、そう見えてしまうのか。われわれが持つ時間意識が、単線的で一方向に進み、不可逆であるからだ。この時間意識のもとでは、われわれは、不可避に死や死滅へと向かっていることになる。すべては、やがてむなしくなる。そういうむなしさが、現在の日本において、高齢社会や将来の社会保障、もっと端的には介護保険の今後を考える上で、きわめて大きいのしかかってくるのである。われわれは、いわば、このむなしさの上にたって高齢社会や介護保険の未来を考えているのだ。

たとえば、高齢社会で成功している現在の「介護保険」が、あたかも失敗であるかのように、成功すればするほど失敗していくかのように見えてしまうのはなぜなのか。成功してもその先は虚しい、成功するほど将来に負担を残してしまう、と見えるのはなぜなのか。その謎の大きな理由が、このような時間意識にあるのではないか。短期的に成功であっても、長期的には虚しいものように思われてしまうのだ。長期的にむなしいとすれば、短期的にも拡大させ発展させることは無意識的に抑制するようになるだろう。

しかし真木もいうように、単線的で一方向に進むという時間の観念は、近代的社会に固有な時間観念であって、けっして人類に普遍的なものでも、超歴史的な真実でもない。西欧近代的な時間概念とは別の時間観と、その時間に従った生き方がありうることを示す、それが『時間の比較社会学』の目的だった。だとすれば、日本社会全体が、高齢社会という壁、人口減少、「地方消滅」という大きな壁にぶつかっている現在こそ、もういちど、真木の時間の比較社会学を読み直す必要があるのではないか。

## 7 時間への疎外／時間からの疎外—「高齢社会悲観論」の構図

真木の『時間の比較社会学』を理論的に要約してみよう。その理論的なエッセンスは「二重の疎外」論にある。それは次のように概観できる。われわれは、ある特定のタイプの時間意識の中に閉じ込められている。ついでその時間意識の枠の内側で苦しみ、悩み、そして悲観したり諦観したりすることになる。ここが要点となる。これは、たんに「時間」についての価値観や意識の問題であるだけでない。むしろ、人間社会のあらゆる場面で起きている現象だといえる。

もうすこしていねいに、真木の議論を見ていこう。

時間についての問題を明確化するために、真木は「疎外」という今ではいささか古びたように見える概念を使う。真木の疎外概念は「二重の疎外」という独特の概念構造になっている。二重であるとは、まず「時間への疎外」があり、ついで「時間からの疎外」という二重の疎外があらわれるという理論構成である。

真木の時間に関する議論は周到で緻密だ。原始共同体の時間意識、古代日本の時間意識、ヘレニズムとヘブライズムの時間意識などを周到に検討したあと、近代社会の時間意識のひとつの典型として、カルヴァンらのプロテスタンティズムの世界観と時間意識を描き出す。そして発見していくのは「時間」はひとつではないこと、時代や社会から独立した抽象的なものではなく、社会の中でその姿を変えることである。まずある特定のタイプの宗教的な観念や信仰と結びついていたのが時間意識であり、そうでしかありえない、ということだ。

「時間のベシミズム／ニヒリズム」が現れる前に、ある特定のタイプの「時間意識」へと、私たち人間は、無意識的に「疎外」されているのだということを、まず真木は発見する。そしてひとたびそのような時間意識に浸されたあとで、私たちは、もういちど、その時間意識からさらに疎外されていくのだ。それが、老いや病や死へと向かっていくという第二の「疎外」である。

私たちが時間とともに生きて、成長して、老いていくという、いわば生物学的な事実と、この直線的な時間から、私たちが次第に疎外されていくという時間意識とは、密接に関連しているが、ただひとつの「関連」ではない、必然でもない、ということ、真木は論じる。ところが、通常、私たちはそれを唯一の連関、つまり「必然」であるかのように意識してしまう。そこに「高齢社会悲観論」が生じる原因がある。「高齢社会悲観論」は「時間からの疎外」そのものなのだ。

## 8 存立構造と時間と高齢社会

真木は、『時間の比較社会学』に先立ち、『現代社会の存立構造』（1977）で、現代社会の存立構造の中心に、労働が「外化を通しての内化」というメカニズムのもとで、二重の疎外にからめとられることを論じている<sup>4)</sup>。

外化とは、人間の行為を「労働」という他者にたいして譲渡されるものとなることである。ついで「労働」へと転化された行為によって得たものによって、生活をなりたさせる。つまり「譲渡をとおしての領有」が起こるとする。この過程が「外化を通しての内化」である。人間は「社会・内・存在」であるから、かならずこの「外化を通しての内化」を行っている。この「外化」が「内化」に回収されない場合、つまり「内化なき外化」が「疎外」である<sup>5)</sup>。

「疎外とは、外化したのにないかされない状態、内化として回収されざる外化である。「労働」したのに、その成果を自分で消費したり、使用したりできないとき、あるいは何か自分に属するものを譲渡したのに、それに相当する他のものが得られなかったとき、疎外が生じる」(真木・大澤 2014: 232)。

だとすれば、この「労働」を「時間」に読みかえらうか。われわれが「社会・内・存在」であるとすれば、われわれは不断に、社会の時間意識を吸い込んでいる。われわれは「外化された時間意識」から逃れがたいのである。しかし時間意識が「外化をとおしての内化」の過程をきちんと経ていけば、われわれの時間意識は、けっして悲観的にも虚無的にもならないのではないか。真木が『存立構造』の10年後に発表した『時間の比較社会学』は、まさに、「外化をとおしての内化」のメカニズムが、時間意識においてもあらわれ、そして「内化なき外化」のままにとどまっている、つまり「時間への外化」がおこったあと、「時間の内化」がない場合、「時間からの疎外」が生じるのではないか。

## 9 疎外のニヒリズムへの転化

こう考えると、現代社会の存立構造は、たんに「労働」の「疎外」がなぜ起こるかを論じただけでなく、われわれの時間意識もまた、なぜ「高齢社会悲観論」や「高齢社会ニヒリズム」へと転化してしまうのか、その内奥のメカニズムを解明したものとして読み解くことができるのだ。

未来に向かう精神一般が、個体と人類の未来に不可避の死をみるがゆえにこの生をむなしと感覚するのは、ほんとうはつぎの二つの時間意識の特性を媒介として前提している。第一にそれは、ひとが現在をそれじたいとして愛することができず、人生の意味を、つねに「時間」のかなたに向かって疎外していく、そのような時間意識を前提している。第二にそれは、「時間」がひとつの自存する実体のように物象化されて存立し、そのことによって時間関心が抽象的に無限化されてゆくという、そのような時間意識の形態を前提している。(真木 1977: 290)

この見方を示された時、高齢社会の悲観論の由来が見えたような気がした。現在をおおっている高齢社会論のペシミズムやニヒリズム、介護保険の行方の見えなさ、後期高齢者医療や年金、社会保障全般が袋小路に見えてしまうこと、など、それらの原因を深いところで示されたように思ったのである。「私たちは、決して解決できないことをやっている。究極的には解決できないことを、虚しく懸命にやっているだけではないか」というペシミズムやニヒリズム、虚無感や諦念が、なぜ私たちの社会に浸透してしまおうのかの、原因や由来が、見えた気がしたのである。

この真木悠介の論じた近代的な時間意識の二重の疎外のメカニズムは、高齢社会悲観論からの脱出を考えていくうえで、重要な入口となるはずだ。

近代人は死の問題を、意識の底に封印している。

それはみずからの死の問題と人類の死の問題とが、近代的自我にとっては解決不可能な問題であると同時に、それゆえにこの問題にかかわってはいは、市民社会を生きてゆくことはできないからだ。(真木 1977: 290)

「高齢社会」にたいする様々な議論も、このような虚無を封印したうえで政策論として論じられてきた。ところが、近年では、この「封印」がどうしようもなくゆるみはじめた、あるいは封印を封印しつづけることが困難になってきた、そこまで「高齢社会」の水位が高まってきて、氾濫が誰の目にもあきらかになってきたのである。

この悲観論やニヒリズムの水位の上昇にどう対抗することができるか。

真木は次のように論じている。

そのような近代資本主義理性の虚無は、この理性それ自体の力によっては反証することのできないものである。この理性の論理をどこまでも明晰に追求していけば、この虚無の正しいことがいっそう逃れようもなく論証されるだけである。(真木 1977: 290)

ではどのような解決がありうるのか。はたして解決など、ありえるのか。

けれどもわれわれはこの理性を「鈍らせること」—感覚的な麻醉とか強迫的な信仰とか、日常生活の気晴らしとかによる「解決」を、とらないことにする。

そこには絶望しかないようにみえるけれども、われわれにはあとひとつだけ、なすべきことが残されている。それはわれわれが、なぜそのような問題をたてるのかということ、それじたいとして知の対象とすることである。ひとつの論理のたてられ方を、そのものとしてみずからの知による探求の主題として眼前におくことである。(真木 1977: 290)

これはきびしくむずかしい「解」である。解であって解でないような、解決はありえないが、ひとつの方向性はあるというような、そのような「解」の方向性の示唆である。はたしてそのようなことか可能なのか。単純ではない、しかし不可能ではないはずだ、というのが真木の答えである。それが『時間の比較社会学』という著作の全体が語っていることである。

死の恐怖や生の虚無ということを知らないたぐさんの人びとがいる。なぜある種の人びとだけが、このような否定しがたい論理の環の中にとりこまれるのか。〈ニヒリズムの元凶〉としての時間が、否定しがたい「客観性」として存立してくるのはなぜか。すべての未来に死があるという事実が、なぜ現在の生をむなしなものとするのか。時間関心がこのように抽象的に無限かされてゆくのはなぜか。生活の「意味」がいつでも時間のかなたへと送り込まれていくのはなぜか。(中略)

(真木 1977: 290)

真木はこのようなあまりにも根源的すぎるような問いを提出する。そしてその答えは次のようなものだ

「この〈虚無〉の存立の規制自体を、知の照明の対象として主題化し追求すること。われわれの「明晰」の罫を、「非明晰」へとのがれるのではなく、「明晰」をそのものとして対象化する〈明晰〉のほうへと、のりこえること」(真木：326)

真木の示すこの「解」の方向性は、正しく理論的な極北を示している。ただし、一挙にそこまでいく前に、まず、われわれの立っている場所を、もういちど確認しておくことが必要だろう。それは、「高齢社会」という「現実」に直面して「非明晰」へとのがれようとしているわれわれの姿そのものだ。「問われない前提」であるのは、それを「問わない」ことにしているからだ。問うたとたんに、われわれは「そこには絶望しかないように」みえてしまうからだ。それが恐ろしいのだ。

しかしそれは真木によれば「罫」なのだという。

このいわゆる「明晰」の「罫」(一見したところ明晰であるように見えるが、ほんとうの明晰には到達していない明晰さ、考えれば考えるほど、それ以外の論理はありえないと見えてしまうこと、考える方向性の先に罫がしくまれているような思考の罫)は、ほんとうは、明晰の底まで、明晰の先の先まで、つきつめてはいない「中途半端な明晰」あるいは「明晰のようにみえる非明晰」なのだ、と真木は論じている。

## 10 「高齢社会悲観論」からの脱出

ここまで「高齢社会」の到来という一見したところの「事実」が、人びとの社会意識のなかで「オーバーラン」していった、高齢化という「現実」や実態以上に人びとの社会意識を拘束していくさまを考察してきた。「高齢化という現実」は現在のひとつの様相にすぎない。しかし、それが未来へ向けての人びとの意識を根底から限界づけてしまうと、それはペシミズムを生み出し、やがてニヒリズムへと転化していくだろう。真木が参照する哲学者ボーヴォワールの態度は、このようなニヒリズムへの転化を、論理ぬきに拒否しようとしたの受け止めかたである。「高齢社会」の生み出すニヒリズムへの断固とした拒否は、しかし、問題を解決するだろうか。そう真木は問いかけている。

もちろん、その拒否は、問題の解決ではない。むしろ問題をより奥深く潜在化させ、問題構造を保存してしまう。そう真木は論じる。

真木は、問題を拒否したり、見ることを拒否したり、ないことにするという態度を批判する。「『明晰』をそのものとして対象化する〈明晰〉のほうへと、のりこえること」という真木の示した方向は、いかにして可能か。それは「諦める」ことではなく、「明らかに見る」つまり「明らかにめる」という方法であろう。

真木は、「時間」という対象へ「比較社会学」という方法でアプローチした。「時間」はひとつであり、直線的に流れ、現在は未来へ向かって帰無していくという「問われない前提」を問い直した。それは、「時間」意識を比較し、比較することを通じて、相対化し、相対化することをつうじて、その呪縛力から脱しようとする試みであった<sup>6)</sup>。

「高齢社会」という姿も、「時間」意識のひとつの産物である。しかもそれはたんなる想像の産物ではなく、現実近づいてきている（ように感じられる）だけに、よりリアルなものとして恐怖をかりたてる。抽象的な「時間」論以上の不安が、そこから生まれる。

しかし、それがやはり一種の「想像の産物」であり、「想像されたものが現実を拘束しはじめている」ことには変わりがない。高齢化や高齢社会を、どうしようもない「現実」であり、変えようのない「運命」だと受け止めたとたんに、「高齢社会悲観論」は生まれて否認しようがなくなる。

でもそれはほんとうに運命的な変えようのない「現実」なのか。それは、そう見えてしまう、そう見せてしまう、私たちの中にある、ひとつのフィルタリング効果なのではないか。

真木の理論的著作は、われわれにまず、そういうことを気づかせてくれる。

それは、福祉社会学における「高齢社会」論の、「問われない前提」を問う大きな課題である。

このような大きな問題は、おそらく、社会保障論でも介護保険論でも社会福祉学でもなく、福祉社会学でしか、挑戦できない課題なのではないだろうか。

## 11 諦めることと明らかにすること

真木悠介の『時間の比較社会学』を「高齢社会論」へと応用したとき、そこに「時間」と同じペシミズムやニヒリズムの構造があることが見て取れる。ペシミズムやニヒリズムに浸されたまま、高齢社会を論じることが、はたして「現実的」な高齢社会論なのだろうか。それは特定の時間意識にもとづいた将来社会像なのではないか。ニヒリズムにもとづいた将来社会像とは「将来はないという社会像」である。それは「いずれ人は誰も死ぬ」というような「時間のニヒリズム」の変奏にすぎない。しかし、そのような一方向へ不可逆的に進む時間意識とは異なる可能性を、真木は明らかにした。高齢社会論にも、このような可能性を導入すべきだろう。そう論じてきた。

それがこれからの高齢社会論の課題だが、ひとつ補足的に問題提起しておきたい。それは「諦め」と「明らかにみる」こととの近接と反転とである。人口の高齢化やその行き着く先を「明らかに見よう」とすると、それは「諦め」に到達する、というのが高齢社会論の現況である。しかし、この諦めにみちた高齢社会論の乗り越えは、人口構造の高齢化という「現実」を否認することによっては得られない。逆である。少子・高齢化や高齢社会という現実を、よりあきらかにみるこそが大切である。しかし、いかにして「明らかにみる」ことが「諦め」にならないようにするか。明らかにみるのが、一見、諦めにきわめて近接するがゆえに、明らかに見ようとする多くの調査や研究が、結果的に諦めを前提とした対策や方法へと褶曲してしまうのだ。高齢社会の「受容」が、「諦め」の受容とならないために、「高齢化の比較社会学」のような大きな試みが、これから必要となるであろう。

### 注

- 1) これを示すひとつの事例として、社会状況としてもっとも悲惨だった敗戦後の数年間をあげることができる。もっとも人びとが生活に困窮し、もっとも生きづらかった時代こそが、もっとも出生率が高かったのである。この事実は考えるほどに謎に満ちている。なぜ世界的に大戦後に「ベビーブーマー世代」が生まれたのだろうか。この時期に出生率が高かったという事実は、はたして人口学で説明できるのだろうか。
- 2) 「オーバーラン」とは本来止まるべきところで止まれず、行き過ぎてしまうことをさしている。飛行機の着陸時などに起こる現象だが、真木悠介は近代社会の諸現象が、ポスト近代になっても止まらずに続くような同様なことが起こるといふ。
- 3) この問題を主題としたのが、安立清史(2016)「介護保険のパラドクスー成功なのに失敗？」である。
- 4) 真木悠介(1977)、真木悠介・大澤真幸(2015)
- 5) 真木悠介・大澤真幸『『現代社会の存立構造』を読む』を参照。

6) 真木は、脱しただけでなく、解放されたという。「解放」は、脱出であるとともに、その先までいくことであろう。それを「解放」というかどうかは別として、相対化するだけでは、脱出したことにはならない、そういう問題提起も含んでいるのだと思われる。

## 文 献

- 安立清史, 2006, 「米国のシニアムーブメントはなぜ成功したか」, 『社会学評論』, Vol.57, No.2, pp.275-291
- , 2004, 「アメリカにおけるニューエイジング研究の動向－ベビーブーマー世代の高齢化をめぐって」, 三浦文夫編 『図説 高齢者白書 2004年度版』, pp.152-161, 全国社会福祉協議会
- , 2005a, 「福祉 NPO 概念の検討と日本への応用」, 『大原社会問題研究所雑誌』, No.554, pp.15-27
- , 2005b, 「福祉 NPO の展開と福祉社会学の研究課題」, 『福祉社会学研究 2』, pp.12-32
- , 2017a, 「介護保険のパラドクスー成功なのに失敗？」 SYNODOS (2017/04/13 公開) <http://synodos.jp/welfare/19524>
- , 2017b, 「グローバル資本主義の中の「非営利」ー「バーチャル政府」の意外な可能性」 SYNODOS (2017.06.22 公開) <https://synodos.jp/welfare/19863>
- 真木悠介, 1977, 『現代社会の存立構造』, 筑摩書房
- , 1981, 『時間の比較社会学』, 岩波書店
- , 1993, 『自我の起源』, 岩波書店
- 真木悠介・大澤真幸, 2014, 『『現代社会の存立構造』を読む』, 朝日出版社